
太平記

佐藤利和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太平記

【Nコード】

N68370

【作者名】

佐藤利和

【あらすじ】

二人の天皇が、北朝と南朝にわかれ、貴族と武士団とが、国じゅうを巻き込んで争った動乱の時代。後醍醐天皇の夢まくらから、歴史の舞台に登場してわずか数年、はげしく、さわやかな生涯を終えた河内の名将、楠野くすの正成まさしげとは、どんな人物だったのだろうか。金剛山の赤坂城、千早城に立てこもり、奇抜なゲリラ戦をくりひろげて、押し寄せる関東の大軍を、さんざん悩ませた武勇・知謀・戦略……。ために天下の形勢は大きく変わり、建武の新政になった。だが、新しい公家政治は二年でくずれ、世はふたたび南北朝の戦乱へ……

。反旗をひるがえし、九州から攻めよせてくる足利尊氏の大軍を、湊川にむかえ、壮絶な戦いのすえに自刃した楠木一族。おのれと、一族の栄達しか考えなかつた武将の中で、ただ一人、ひとすじに天皇への忠誠を貫いた、ふしぎな武将。いま、皇居前広場に建つ楠公像は、人々になにを語りかけてくるだろうか。

学問好きな多聞丸

東に葛城、西に河内丘陵、南に和泉山系、三方を山にかこまれたこのあたりは、赤坂水分の里とよばれている。

村に小高い赤坂山があつて、その中腹には大きな屋形がある。

それほど古い屋形ではないが、庭に楠木の古木がそびえたっている。村人たちは、「楠木の長者屋形」とよんでいる。

その中庭で、二人の少年が、くんずほぐれつ取り組み合っていた。

長男と多聞丸と弟の七郎だった。だが、三さい年下の、

七郎のほうが強い。とうとう兄を組み敷いて、いまにもなぐりつけようとしたときだった。

「こりゃ、うぬら、なにをしているぞ！」

かみなりのような声が轟いた。

縁先に坊主頭ながら、頬に大きな刀傷のある大男が立っていた。父の入道正澄であつた。正澄は縁先からおりてくると

いきなり七郎の襟首をつかんで、その横面を平手打ちした。

「七郎、多聞に向かつて無礼をするな。楠木家の後取りじゃぞ。」

なお、七郎をなぐるうとする父の手を多聞が必死でおさえた。

「やめてください父うえ。もとはといえはこの多聞がわるいのです。私が七郎の相手はしてやらなかつたからです。」

多聞が父にわびると、突然七郎が

「ち、ちがう！ わるかつたのはわしじゃ！」

と、さげふと「わっ！」と泣き出してしまった。

読書をしていた多聞、弟の七郎が、村のこどもを集めて

合戦ごっこにつれだそうとして、それをいやがる兄とのあらそいになつたらしい。今日にかぎつての事ではなかつた。

やっといかりのしずまった正澄は、声をやわらげて言った。

「食事をすませ、これから玉串の市へつれていってやる。」

七郎はいいぞというように拳をつきあげたが、多聞は気がすまない。

市のある玉串荘は、河内平野中央部の東はしの、玉串川流域にある荘園で、水運の要所である。

「わたしもですか。」

「うん。そろそろ後取りのおまえにも、玉串の市の商いなどを知ってもらわねばならん。」

と、いったあと正澄は考えた。

土地のあらそい、商売、それらの利益をめぐって、小さな合戦をくりかえしてきた正澄であった。

顔だけでなく、肩や二の腕にも矢傷があった。

しかし、これからの時代、市場を制し、大きくなった楠木党をまとめていくのには、学問をいやがるふうもなかったので、

山一つむこうの観心寺へ勉強にかよわせた。

それはそれでよかったのだが、多聞は、すっかり学問好きな僧のようになって、あらそいことをきらうようになっていた。

「人は、わしのことを無類のけんかずきのようにいうが、

わしとて、あらそいはきらいじゃ。しかし、あらそいをさけていたのでは、世間のかたすみにおいやられてしまう。」

父の正澄はときおり、多聞にいいきかせるのだが、あまり身にしみてきいてはいけないようだった。

悪党、楠木入道正澄

大阪府の東南部を、河内という。その名の通り、たくさんの川がながれている。

つまり「河地」なのだ。

十四世紀、この国は、西から商いがさかんにりはじめていた。機内では、摂津、河内がさかえた。

大きな荷物は、馬で運ぶより、船が便利だ。

それで、川すじが四方八方におよんでいるこの河内は、出船、入船ににぎわい、

たくさん市がたつようになった。

この川の一つ、東条川をたどっていく三そうの船があった。

東条川は、千早川と水越川との合流点から下流のあたりをいい、石川にながれこむ。

それぞれの船に五人ずつ、たくましい商人がのりくみ、積み荷を守っている。

商人といっても、それぞれ太刀をさし、弓、なぎなたなどの武器をたずさえていた。

まん中の船に、そでをくくり、すそをはかまの中に入れた、ひたたれ姿の大入道が

箱膳でぐびりぐびりと、さかずきをかたむけている。楠木入道正澄だ。

酒のさかなは、琵琶湖でとれた、ふなのかんろ煮だ。

「多聞よ、よくみておくがいい。」

と、正澄は川岸の村々をあごでしゃくった。

弟の七郎も、父の話にききいつている。

「これからいく玉串の市は、おまえたちが一人まえになるころは、京や鎌倉をしのぐ町になっているにちがいないところだ。」多聞はだまって話を聞きながら、うつつていく川岸の風景をみつめていた。

このあたりも、ずいぶんくすのきが多いな、とおもったときだ。矢羽の音がして、船底に一本の矢がつきささった。

「何者じゃい！」正澄は、さかずきをおくと、とももの者の手から、弓矢をうばいとるようにして、

岸にむかって矢をつがえ、川崎市のくすのきのこずえをみあげた。

だが、正澄が矢を射るまでもなかった。くのきの枝からとびおりたくせ者は、

たちまち、川ぞいの道をいく武者たちにとりかこまれた。こういうこともあるつかと、

楠木党の者たちに、川ぞいの道をあゆませていたのだ。

「生きてとらえよ！」と、正澄はさけび、船頭に命じて、船を岸につけさせた。

くせ者は、黒の覆面をはぎとられ、数人の武者たちに河原へひきずられてきた。

「ようとらえたぞ。ほうびじゃ。」

正澄は手にした小袋から、銭を一さしとりだして、武者たちに手わたした。

「わしを楠木正澄としてのおえか。」

「……」男はだまって小さくうなずいた。

「だれにたのまれた？」

「……」

「よし、いわねば斬る。」正澄は太刀の柄に手をかけた。

「お、おゆるしく下さい、わたしには妻も子もおります。」

「あほうめが。わしにだって、妻子がおるぞ。」

「もうしわけございませぬ。」

男は、ひたいを河原石にすりつけていった。

「ま、よい。いわんでもわかつている。八尾常光寺の別当、顕幸であるつか。」

「……」

「なるほど、口はわらぬ約束で、この仕事をうけおったものとみえ

る。先に約束しておこう。

いのちは助けてとらす。」

「ありがとうございます。」男はまた河原石にひたいをすりつけた。

「ならば、かわりに、わしにももつけさせる。」

「はあ？」

「かんたんなことよ。八尾の船は、いま、なにをつかんで、かせいでおるのじゃ。」

男はなんだ、そんなことかと、ほっとして答えた。

「吉備から米を運んでおります。」

「受け取りは東大寺か？」

「そのようです。」

「このごろ、つみだすものはなんじゃ？」

「伊勢からの辰砂のようです……。」

「それは京か？」

「はい、そのようです……。」

「川すじに、なにかかわったことはないか。」

「これはうわさでございますが、なんでも、東大寺さまが、兵庫や神崎の泊まりに

関所をもつける準備をしているとか。」

「おろか者めが！」

正澄の声が大きかったので、男はみたび、河原石にひたいをすりつけた。

「おまえのことではない。あるじの八尾顕幸のことよ。八尾もわしも、おなじこの河内の

川すじや、玉串の市で、商いをする仲間じゃ。東大寺や、公家、近ごろは幕府の

役人たちも、わしらを、悪党とよんでるそうじゃが、なれば、わしらは悪党どうし

心をついにしてゆかぬば、この川すじや、せつかくひらいた散所を、また、公家や、幕府に

うばわれてしまう。仲間われしては、公家や幕府の思いつぽではないか。」

と、楠木入道正澄は顔をあらかめて語る。

とにかく、殺されてもしかたがないところを、助けられた八尾の家人は、正澄に

米つきばったのように、なんども頭をさげると、川下へ走り去った。

「首をはねられるとおもいましたが・・・。」

と、先代から楠木家につかえる恩地左近が苦笑していった。

「殺してもなにもならん。太刀の刃こぼれになるだけじゃ。生かしておけば、ひよっとすると、

なにかの役にたつかもしれん。」といって正澄はわが子をかえりみた。

「多聞はどうおもう?」

「わたしも血をみるのはきらいです。」

「いやいや、そういうことをいっているのではない。怒りはなんの得も無いとおしえたつもりぞよ。」

と、正澄は、そのまま船にはもどらず、岸につないであった馬にまたがった。

紺のひたたれに、かざり太刀、従者に手綱をひかせた馬上の正澄のすがたは、

どうみても、幕府につかえる名のある大名のようであった。

にぎわう玉串の市

恩地左近らが手配して、積み荷をのせた船は、川岸をいく、楠木正澄と平行してくだる。

石川は、やがて大和からながれてきた大和川にかさなる。

この大河にながれこむ川は多い。玉串川も、その一つだ。

楠木正澄は、この玉串川をいく。人々の行き来がはげしくなる。

僧もいれば、武士もいる。荷を馬につんだ馬借の一行、農民、親子づれ、ときには

人形つかいの芸人たち。みんな玉串の市をめざしていくのである。

楠木正澄、多聞、七郎の親子も、十数人の武者に守られて、玉串の市にはいった。

川ぞいに、板屋根つきの小屋が、むかいあつてたちならんでいる。

あさ・大豆・うりなどの農作物売り。くわの刃、牛や馬にひかせるからすきの農具、

なべ・かま・茶碗などの生活用具、ぶつそうな大太刀・なぎなた・

太刀などの武具を

売る。商人たちは、正澄に気づくと、みな頭をさげた。

店なみの中ほどまでいったとき、ひときわ大きな板屋根つきの店があった。

中から、しらが頭の老人がとびだして頭をさげた。「あ、これは楠木の長者さま。」

「その長者さまはやめる。」入道正澄が、にがにがしそうにいった。ここは楠木がこの玉串の市につくった詰め所だ。

荷をたくわえる倉もかねている。おなじような小屋を八尾頭幸も、榎坂太郎左衛門助村ももっている。

みな、田畑をたがやすだけでなく、船や馬をつかって荷を運ぶことで、近ごろ、

きゅうにいきおいの強くなってきた一党だ。

「長者さまでいけなければ、なんともうしあげましようか。」

「お屋形さま、とよぶがいい。」

正澄はむねをはっていった。

楠木正澄にかぎらず、八尾顕幸も榎坂助村も、このあたりの村人、待ち人たちからは

「長者さま」、あるいは「散所太夫さま」などとよばれている。

この河内には、散所が多かった。

たくさんの方がながれるこの地方は、大雨がふるたびに洪水となつて田畑をながし、

河原の荒地としてしまう。こうしたことがたびかさなると、農民たちはそこをあきらめて、

よその地へさつていく。人の住まぬ河原の荒地は、もうだれのものでもない。

しばらくすると、この荒れはてた散所にも、どこからともなく人が集まってくる。

かれらのある者は、莊園領主の年貢のとりたてがきびしいので、村をにげだして

こじきになってさまよう農民たち。

また、ある者たちは、村から村をまわって歩くくぐつの一団。

くぐつとは、人形つかいのことだが、歌もつたい、おどりもするし、手品をやってみせたりする。

そのほか難波の港についた品物を馬につんで、みやこの貴族や、六波羅に住む武士の

屋形に運送する馬借の一団が、ここが便利と住みつくということもある。

もとは、人の住めない散所が、こうしたさまざまな職業の人たちが住みつくことによつて、

活気づいてくる。この散所の人々に、すき・くわを貸して、荒地を田畑にたがやさせたりして、

ゆたかになっていく者があらわれてきた、これが「散所の長者」。

散所太夫」だ。

森？外の小説にもなった伝説の「山椒大夫」は、この散所太夫のよ
うな人物だった。

「炭を百俵運んできた。」と、楠木正澄が、小判屋にいった。

「そんなにたくさん・・・？」小判屋が齒のない口をぽかっとなげ
ていったときだった。

ついと、旅すがたの男があらわれた。

「なんの、そっくり買いましようぞ。」

「おお、これは樟葉どのか。」正澄が、男にむきなおっていった。

「檜物づくりには、炭はいくらでも必要です。近ごろは、海をわたっ
て、唐の国にも運びます。」

檜物づくりの樟葉という男は、自分でつくった檜扇で、正澄の赤ら
顔に風を送っていった。

檜物とは、ひのきや杉のうす板を、火であぶって、鉢・箱・盆など
にした、さまざま加工品のことである。「いや、全部はやれぬよ、
樟葉どの。」正澄は手をふってうちけした。

半分の炭を刀鍛冶師に売る約束なのだ。

玉串の市は、月に三回ひらかれるときまっていたそうだが、近ごろ
は、ほとんど毎日

と行ってよかった。それというのも、銭というものが、人々のあい
だにゆきわたってきたからだ。

すると、とつぜん、ぷうんと、顔をそむけるほどのおいがした。

けもの肉をやく、あぶらのしたたりが火にこげるにおいなのだが、
多聞兄弟はびっくりした。

市のうしろをながれる川には、犬の死体などがただっていたりする。
多聞は、父の気持ちかわからない。

「長者屋敷」とよばれる楠木屋形は、金剛山のふもと赤坂水分にあ
って、くのきや、ときわ木の

みどりにつつまれ、水清くなされる里だ。

それなのに父は、仕事のうえとはいえ、このにおいの強い、よこれ

た町、玉串の市に
くるのが、よほど楽しいのだ。父の正澄は、
鑄物師の長と語りあっ
ているうちに、
昼日中の酒もりとなった。

にげてきた子ども

多聞と七郎は、市をものめらずしげにまわってあるいた。

道のまん中で、ごさをしいて、かけごとをしている男たちもいた。

寺社のかごかきたちらしく、川べりにかごをおいてある。まわりを、人がとりかこんでみいつていた。

とつぜん、その人ごみを走りぬけ、多聞のわきをすりぬけようとす
る者がいた。

多聞よりはまだおさない男の子だった。

「助けてくれ！」

子どもが、多聞にむしゃぶりついた。なにごとかと、

多聞が顔をあげると、むこうから、そでなしの肌着だけの荒れくれ
男たちがおってくるのがみえた。

男の子は、むちゆうで多聞にむしゃぶりついたものの、それがおな
じ子どもであったと気がつくつと、

「ちえっ！」と舌うちして、また人群れをかきわけて、玉串の土手
にむかつて走っていった。

「やろう！まちやがね。」 荒くれ男二人も、おつて土手にむかっ
た。

すると、七郎もいきなり走りだした。

「七郎、あぶないことはするな。」多聞が、あわてて声をかけた。

子どもをおう二人の男に気づいた通行人がいたが、どうやら、こん
なさわぎはいつものことらしく、

だれも助けようとしない。子どもは土手にあるくすのきをみつける
と、その下枝にとびつき、

そのままぐるりと、さかあがり回転して、枝の上にたつた。それ
から、まるでさるのようた、

枝から枝へとびうつつて、たちまちこずえ葉群れにかくれた。

多聞と七郎は、はらはらしてみていたが、子どものすがたがみえな

くなつたので、ほつとした。

でも、そんなことであきらめる相手ではなかつた。一人が市へもどると、弓矢をたずさえてきた。

「おりてこい。おりなければ殺す。」

荒くれ男が、こずえにむかつて、おどしではないぞ、というように一本の矢を射た。

子どもは、しかたなしにおりてきて、中枝に立った。

「さ、おとなしくおりてこい。」

「いやじゃ。わしは人買いに売られたおぼえはないぞ。」

「わからぬやつよ。きさまのよいおやじには、八百文の貸しがある。そのかたにきさまをもらったのだ。」

「きさまは、興福寺さまの一乗院に売られているのじゃ。」
「と、もう一人がいった。」

多聞と七郎は顔を見あわせた。

「兄者、あれは人買いじゃぞ。」

「人の売り買いは、してはならぬおきてぞ。」

「ちえつ、おきてや法が、この玉串の市で通用するとおもうのか。」

市のことは、弟の七郎のほうがかくわしい。

「いつちよう、助けてやるか！」

つぶやいた七郎は、いきなり足もとの小石をひろって男に投げつけた。

男は「ぎゃっ！」とさけんで、手で顔をおおった。

「このがき、なにをしるさる。」

もう一人の男は半分さやがかけおちて刃先の露出した刀をぬいた。すると七郎も負けずに、こしにさした、わきざしをぬいた。

「さて、話しあうのじゃ。」

多聞が、あわてて七郎をかばった。

「くそ、きさまもいつしよに死ね。」

男はらんぼうにも多聞に刀をふりおろした。

「あっ！」

とびさかりながら、無意識に多聞も、わきざしをぬきながら、横にうちはらった。

かすかな手ごたえがあつて、男の二の腕から血がながれた。すると石でやられたほうが、市にむかつて大声でさげんだ。

「おい、みんなきてくれ。市場荒らしだ！」

声をききつけると、たちまち数人の荒くれ男が、棒、なぎなた、弓など、それぞれ手にしてかけつけ、

兄弟をとりかこんだ。かしららしい男が、殺気走った目をむけた。

「みたところ、お武家のせがれのようなだが、この玉串じゃ、武士も公家も通らねえ。

通るのは銭だけだ。」

「しかし、人の道にはきまりがあるはずじゃ。」

多聞はわきざしをかまえたまま、さげぶようにいった。

「はっはっは、そうともよ。売り買いの銭には、武士も農民もない。これが人の道よ。」

「いや、人の売り買いだけは禁じられてあるはず。」

「かたいことをいわれてもこまるぜ。それはお上がかつてにきめたこと。」

玉串のきまりは、散所のおれたちがきめる。」

と、このとき、この無法者の群れが、にわかにくずれた。

楠木の党第一の豪の者、神宮寺小太郎がかけつけたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6837o/>

太平記

2010年11月6日15時04分発行